

働き女子のごほうびセミナー

「働くということ」

2. 仕事をつくり出せることに気づいた 30 代

千葉：そして、そのあとはどんなお仕事を？

庄子：そのあと、秘書課の職員係という職員のお世話をする係があつて、私は職員の福利厚生を1年だけやることになるんですね。そこで地方公務員法とかそういう地方公務員の基礎的なところをやり始めるんですが、当時の係長が、これからは女性がどんどんいろんなところに出ていくべきだという考えで、いろんな研修に参加させてもらいました。ある時、福島県内の市町村の職員が集まる研修に行かせていただいて、初めてほかの市町村の人たちと話をする機会があつて、でも、そこには女性職員は私しかいなかったんですよね。やっぱり、女性職員は出してもらえないんだなと思って、でも、私はたまたま出させていただいて、そんないい経験をさせてもらったんですね。そのあと、市長秘書の業務を4年間やりまして、市長秘書は内勤のお仕事が多くて、なかなか出張とか出してもらえないんですけど、そのときも最初に千葉先生と出会う機会になったふくしま自治研修センターの長期研修に出してもらえました。1年間の研修で、千葉先生にいろいろアドバイスしていただいて、「すごいラッキー」なんて。



千葉：秘書課4年間で1年目を経て出してもらったのですか。

庄子：そうです。出してもらって。びっくりしました。

千葉：そのときに初めて庄子さんにお会いして。

庄子：そうなんですよね。

千葉：元気な職員がいるなど、私もそういう機会は初めてで、大変楽しくあの1年やらせていただいたことを記憶しています。

庄子：秘書係って内勤の仕事であまり政策に関わることがなくて、そんななかあの研修でより政策に関わることになって、すごい楽しかったです。あの研修は県職員と市町村職員がグループを組むんですね。そうすると、市町村職員と県職員で、政策の考え方の違いがわかって、それがものすごくよかったですね。あの頃から地方分権のはしりになってきた時代で、自分のまちを自分たちで自ら考える、課題はしっかり捉えるとか、そういうことを少しずつやっていく時代だったかなと思いますね。

千葉：自分で調べて、最後に政策提案するんですよね。

庄子：そうそう。

千葉：大変おもしろかったです。で、政策形成というか、その重要性みたいなこともさらにわかってくるということですよね。



庄子：そうです。だんだんおもしろくなってきたんですね。市役所の仕事っていろんな仕事ができるということで入ったんですが、仕事をつくり出していくとか、そういうことができそうだということがわかってきました。

千葉：そのあたりからかなり自覚的になっていくわけですか。

庄子：はい。あの頃から私の中では黒船が来たみたいなインパクトがありました。

千葉：このころおいくつぐらいですか。

庄子：30代半ばでしたね。

千葉：まだヒラなんですよね、そのころ。

庄子：ヒラのヒラでしたね。名刺もないくらい。

千葉：先ほどのことに戻りますけど、1年間の研修に出してもらおうとか、南相馬市は積極的に職員を派遣するといったことは、継続してやってこられていたんでしょうか。

庄子：当時は原町市でしたけど、やっていましたね。必ず県には研修として派遣していましたし、それでネットワークを広げてきてほしいというのが当時の人材育成の考え方だったと思います。ただ、やっぱり女性にはそういう機会がまだなかった時代ですね。さきほどの研修も、女性は2人だけでした。私ともう1人は保健師さんで、やっぱり女性はあそこ少なかったですよ。

千葉：やっぱり女性が目立ちましたね、どういう人かなって。そのあとは？

庄子：そのあとは、また転機があって、福島に財団法人自治研修センターの「シンクタンクふくしま」という県の組織があって、そこに3年間出向することになりました。女性職員を長期に派遣するということは当時の原町市役所ではまるっきり初めてだったし、みんなから「本当に3年間行くの？」って言われました。それでもなぜか声をかけていただいて、私でいいのかなと思いつつも、ちょっと違う世界というか違う仕事を見たいと思って引き受けました。

千葉：お断りするという選択肢もあったんですか。

庄子：ありました。家族とよく相談してくるようにと人事から言われていたので、断ることもできました。でも、両親は「どうぞご自由に」という感じで、私も「そうですか」と、成り行きですと行ってしまったような感じですね。

千葉：むしろ周辺の方々が、心配もし、驚きもし。

庄子：本当にみんなすごい心配してくれて、3年間は長い、1年ぐらいだったらというふうに言われましたけど、やっぱり時代だったんでしょうね。今ではもう、南相馬市役所から3年ぐらいの派遣というのは女性職員でも行っています。今では全く当たり前ですね。

千葉：そうですか。庄子さんは、本当にいろいろ初めてのところを切り開いてきた人、ですね。

庄子：まあ、私が開いたというよりも、開ききっかけをもらってという感じです。

千葉：それで3年間シンクタンクでお仕事をなさって、それでまた変わりましたか。

庄子：変わりましたね。シンクタンクなので政策的なことを中心にやりますし、あの組織は当時の90市町村、県内くまなく見て歩けるような組織だったので、いろんなところに行って地域課題を見ることができて、本当に勉強になりました。そこに県の職員も当然いたし、私たち市町村からの出向組もいたし、あと、民間から出向している方もいました。組織が違うところから来ていますので非常に勉強になったのと、

あのころ Windows98 ぐらいのときで、情報のデータ処理がどんどん進んでいきました。これからはこういう事務処理をやるんだというところもびっくりして、いろんなことを経験できましたね。

千葉： で、戻ってきて係長になるんですか。

庄子： いや、まだ係長にはならなくて、企画課というところで、分権や、それから、市町村合併の仕事をしました。企画課には9年間いました。



千葉： 結構長いですね。

庄子： ずっと、先輩を送り出していました。

千葉： 今まで政策に関わるような畑を歩いてきたから、そういうことを十分生かすことができる職場でもあったのでしょうか。

庄子： そうですね。いろんな政策を見てこられたので、企画課では結構いろんな仕事ができただけかなと思います。

千葉： この期間、大変だったことは？

庄子： そうですね。地方分権一括法が施行になったり、あとは介護保険法が施行されたり、NPO法も施行されたりして、行政領域の概念がどんどん変わっていった時期でした。それまでは、行政の仕事・民間の仕事って二分だったんですが、それがグレーゾーンというか、民間と行政がどっちをやってもいいとか、半分ずつやったほうがいいのか、そういうふうに行行政領域がだんだん変わってきて、それについてどうすればいいのかという仕事が多かったと思いますね。指定管理者制度で公共施設を民間に委託するとか、そういうのも始まったところだったと思います。

そのころちょっと悩んだのが、小泉内閣で「小さな政府論」というのがあって、「官から民へ」というキ

マッチフリーズがあったんですね。それで、市町村の仕事のコアの部分は実際何なんだろうと。国の仕事もする一方で、市町村の仕事で最後まで残る仕事というのは何か、市町村というのはどうあるべきなんだろうということを悶々と考えて、そんなときに、市役所の中ではなかなかそういう話をする人もいなかったんで、自治体学会というネットワークに入っている他県の市町村の職員とかそういう人とやりとりをしたりして、すごく元気をもらいました。

千葉： それまでは、せいぜい県内だったけれども、全国の自治体職員の方々ともつながりながら学び合う機会を、積極的につくっていったということですね。

庄子： そうですね。全国にはすごい職員ってやっぱりいるんですね。そういう方のお話を聞けるだけで全然違うというか、そんなことはありましたね。

千葉： そういうところには、すぐれた女性職員もおられましたか。

庄子： いました。むしろ女性のほうが多かったかもしれないですね。いるところにはいるんだなど、本当に励みになりました。

